

- ロ. 気象エコー発達の日変化を知る
- ハ. 気象エコーの発生や移動についての土地の癖を知る

天気の局地予報をだすにはその土地の癖を知っていることが必要であると同様に、レーダーで得られる情報を利用しつくすにはこれら気候条件を十分に理解していることが必要である。

6. む す び

レーダーを気象目的に利用することはアメリカにおいてまず航空の安全を守るために各主要空港において実施され、後になって洪水やトルネードなどの災害を予防する目的にも使われたのであって、利用方法としても2時間以内ぐらいの変化を推定することにほとんどの場合が限られていた。したがって3時間以上先の天気予報にどう利用してゆくかという問題についてはまだ幾つかの試みがなされているだけで、それを実用化させるにはまだ多くの研究が必要であろう。なお本稿の閲読を願った今井一郎博士に感謝します。

参 考 文 献

- 1) Myron G.H. Ligda & others, 1956: Study of the Synoptic Application of Weather Radar Data, Project Report, Texas A & M College.
- 2) Myron G.H. Ligda, 1951: Radar Storm Observation, Compendium of Meteorology,

- American Met. Soc., p.p. 1265—1282.
- 3) M.G.H. Ligda, S.B. Bigler, R.D. Tarble, L. E. Truppi, 1956: The Use of Radar in Severe Storm Detection, Hydrology, and Climatology, Project Report, Texas A & M College.
- 4) G.D. Smith, M.G.H. Ligda, 1957: The Use of Composite Radar Photographs in Synoptic Weather Analysis, Project Report. Texas A & M College.
- 5) S.G. Bigler, R. D. Tarble, Application of Radar Weather Observations to Hydrology, Project Report, Texas A & M College.
- 6) Lloyd E. Jacobs, 1957: Kinematics of Precipitation Echoes, Technical Note, Texas A & M College.
- 7) F.W. van Straten, 1957: Radar as a Weather Instrument A Manual, NAVAER 50-1P-544, U.S. Navy.
- 8) Hal Foster, 1955: The Use of Radar in Weather Forecasting with Particular Reference to Radar Set AN/CPS-9, Technical Report No. 20, M.I.T. Dept. Meteorology.
- 9) J.S. Marshall, W. Hirschfeld, K.L.S. Gun, 1955, Advances in Radar Weather, Advances in Geophysics Vol. II.
- 10) M.G.H. Ligda, 1953, The Horizontal Motion of Small Precipitation Areas as Observed by Radar, Technical Report No. 21, M.I.T.
- 11) 今井一郎, 1959, レーダー気象, 気象庁研修所テキスト。

大 会 の 講 演 数 と 講 演 時 間

気象学会大会のプログラム編成のための参考資料として1959年以降の春秋2回の大会の講演数と講演時間を調べて見たところ下表のようになった。ただし講演数はプログラム所載のもので、その後の追加、取消などは含んでいない。総講演時間も同様で、実際のものではない。一講演当りの平均時間は総時間を講演数で割ったもの

年	春 季			秋 季				
	場 所	講 演 数	一 講 演 当 り 総 時 間	場 所	講 演 数	一 講 演 当 り 総 時 間		
			時 間 分			時 間 分		
1954	東京	81	28	21	東京	33	15	27
1955	大阪	82	19	14	東京	52	17.5	20
1956	東京	92	20	13	東京	66	21	19
1957	名古屋	94	29	19	東京	76	28	22
1958	東京	91	24	16	仙台	69	28	24
1959	東京	97	32	20	福岡			
平均		(89)		17分		(59)		22分

で、申込時間とは違い討論の時間も含んでいる。

この表から分るように、講演数は年を追うて増加の傾向にあるが、こゝ3、4年は春季90~100、秋季70前後と大体きまって来たようである。開催地にはあまりよらないらしい。秋に少いのは地方の人の参加が少いたためである。1959年から56年にかけて秋が急増しているのは、気象研究所報告会から秋季大会へ漸次移行したことを物語っている。

一講演当りの時間にはかなりの変動があり、春の平均が17分、秋の平均が22分となる。春は総会など行事が多いので窮屈になるのはやむを得ないが、今後はなるべく行事の時間を短くして講演時間にゆとりを持たせるようにしたいものである。

今 井 一 郎